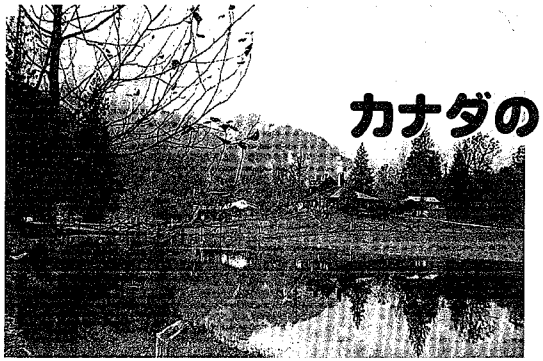
カナダの生活文化を訪ねて

市民海外派遣研修報告…②

今年の研修地はカナダ。前回に引き続き、バンクーバーを視察したほか、一般家庭にホームステイ、スコーミッシュの農場にファームステイなどをした参加者のリポートをご紹介します。



カナダの小学校を視察して

中山恵里（車場4）

カナダ全州の中で最も識字率が高く、教育水準もトップレベルの数値を示しているブリティッシュコロンビア州にある中規模の小学校、マリーヒルエレメンタリースクールを訪れました。在籍児童数は約四百名。

校長先生のマクナリー氏以下二十五名の常勤スタッフがおり、週に何回かは外部からコンピューターや司書、音楽専門のスペシャリストが来てレッスンを受け持っています。

この教員一人あたりの生徒数はカナダ内では平均的なものだそうですが、日本のそれに比べて約半分ほどの生徒数ということになりましょうか。

中山さん

カナダでは二カ国語教育が行なわれているのは有名ですが、この学校もやはり英語クラスとフランス語クラスの二つに分かれて授業を行なっていました。イギリス系の民族が全人口の八〇％以上を占め、フランス系の民族は二％に満たないというブリティッシュコロンビア州であってもその教育方針はしっかりと具現されているわけです。効率化を進めるあまり少数意見を切り捨てがちな私たちですが、やはり、基本的な部分はしっかりと見据えておかなければならないのだということを再認識させられました。

この学校では生徒の個性や必要度に応じてフレキシブルに物事を進めていく柔軟性があり、生徒同士で話し合い、協力しながら問題を自主解決していく思考のプロセスに重きを置いている、という教育方針を校長先生が私たちに熱く語ってくださいました。

カナダでは教育は各州（市）に権限がおかれていますが、学校ごとの自由裁量度がずいぶん大きいそうです。異学年編成のSPLIT CLASSや学校常駐のカウンセラーの存在、カリキュラム内容や知識を詰め込むだけにとらわれるのではなく、いかにしてその問題の答えを見つけるかという過程こそが大切なのだという彼の論に、根強い学歴偏重社会に身を置きながらも、いまだ解決の糸口を掴めないでいる私たち日本人一行が歯がゆい思いをしたことは言ずるに及ばないことでしょう。

また、もう一点強く感じたこと。それは、情報化・国際化社会とうたわれる現代にこれから生きていこうとする子どもたちのために、彼らが創造的にかつ、自由にコンピューターを操って世界に羽ばたくことができるように環境を整えていかなくてはいけないのだということです。ハードだけでなく、優秀な教材それに人材。カナダの学校図書館を見学したときに、何枚かのCD―ROMが目にとまりましたが、百科事典のソフトやお絵描きやワープロ等のソフトで子どもたちが自由に使うことができるそうです。欧米では電子教科書も現われています。週に一～二時間ずつコンピューターのレッスンを受けている子どもにとっては、パソコンを操作して分からないことを調べたり、休み時間にグラフィックで遊んだりすることはごく当たり前のことなのでしょう。

いまやインターネットを使って世界中に友達をつくることも夢ではなくなりました。マウスクリックひとつで一瞬にして世界中のあらゆる情報が手に入る時勢です。であるが故に、世の中に氾濫する膨大な量の情報の波におぼれることなく、自らに必要な情報のみをキャッチし、そのデータを的確に処理活用できるように正しい道に導いていくのが私たちの役割でもあると思います。

小学校のコンピュータールーム

体育館には英語と仏語の表示

市民海外派遣研修生の皆さん（マリーヒル小学校にて）

ホストファミリーと盛山さん

「真の豊かさ」とは

盛山綾（柄目木）

今回の研修地、カナダ第三の都市バンクーバーに着いての第一印象は、大自然と近代的な都市の機能が無理なく共存している街…そんな印象を持ちました。どの住宅も、芝生はきれいに刈られ、豊かな樹木に囲まれ、まるで公園の中に家を作っているかの錯覚にかられました。

私のホームステイ先は、趣味がガーデニングでもあるというパーカー夫妻のお宅でした。芝生の手入れも行き届き、まだ夏の終わりを感じさせてくれる色とりどりの草花が咲いていました。庭や住宅の手入れは、ご夫妻の生活の流れで当たり前のことのようで、築三十五年というお宅は、外壁や内装は時々に手が加えられ、新築そのもののようでした。

盛山さん

家の中は、三十数年前に母親から贈られたという手作りの刺繍の絵、パッチワークのベットカバー等々が大切に使われ、装飾され、使い勝手がいいように整理され、風習や文化の違う日本人が訪れても違和感のない暖かな家庭の雰囲気がいっぱいでした。

今回の研修目的の一つでもある生活ゴミが今、社会問題になっております。日本の二十七倍の面積でいまだ人間が踏み込んだことがない土地を持ち、その地下には多種多様で豊富な天然資源が眠っている国。このカナダでは、国（行政）と企業と個人が三者一体となって、家庭ゴミとリサイクル（廃棄物の再利用）のゴミ問題に徹底して取り組んでいました。

リサイクルできるものは細かく種類ごとに「数字」で分けられます。ビンや缶、ボトルなどの底にはすべて数字が打ち込められ、紙パックやトレーなどにも数字が印刷されています。その数字に従って各家庭で分別して出します。それを行政が集め、企業に買ってもらいます。その結果、行政の収集経費はプラスマイナスゼロになるそうです。

徹底して国をあげて自然を保護し、資源を大切に守る国カナダ。行政の指導のもとで、個人もごく当然のこととして、自国の自然と資源を守っている姿は印象的でした。パーカー家でもバナナ一本の皮や、わずかなりんごの皮でも自然（土）に返すという気持ちで、庭の片隅の木枠で囲まれた場所に捨てていました。新津市もゴミ袋を有料にしてゴミの減量化を図っていますが、私たちも行政の動きに頼るだけでなく、一人ひとりの小さな心構えで美しいまちづくりに協力していきたいと感じました。

四日間で私のウエストも少し細くなるくらい、パーカー家の食生活は〝簡素そのもの〟でした。でもしっかりと愛情いっぱいの手作りのものが食卓に出ます。夫人が家の裏山で採ったラズベリーやブルーベリーのジャム、食後に出されたケーキ、豆といろいろな野菜を煮込んだスープ、パン等々。

日本は今、飽食の時代で、物がありあふれ、二十四時間営業のコンビニが至る所にあり、インスタント食品が氾濫しています。こうした中、今回の研修は「真の豊かさ」を考える良い機会になりました。物質的に豊富なことも「豊かな」ことかもしれませんが、私はやはり、自然や物を大切にして、目には見えない心の豊かさが真の豊かさだと思います。

リサイクルセンター（バンクーバー）

リサイクルセンターの受付

パッチワークのベットカバー